

# 平成 22 年度 FD セミナー報告

都市教養学部法学系准教授 尾崎 悠一

平成 22 年 10 月 7 日（木）13 時から、南大沢キャンパス 6 号館 101 教室において、「単位制度の実質化シリーズ No.2 学生の自発的学習を促す」をテーマとする平成 22 年度 FD セミナーが開催された。参加者は 91 名（教員 48 名〔うち日野会場 6 名、荒川会場 6 名〕、職員 32 名〔うち日野会場 3 名、荒川会場 3 名〕、学生 2 名、その他 9 名）であった。

冒頭で、原島文雄学長による開会の挨拶と、司会の梶井克純教授（本学 FD 委員会研修部長）によるセミナーテーマの趣旨説明がなされた後、前半の部として、名古屋大学高等教育研究センターの夏目達也教授の講演が行われた。休憩を挟んだ後半の部では、本学の教員より「自発的学習を促すための取り組み例」が紹介され、その後、ディスカッションが行われた。なお、このセミナーは日野キャンパス・荒川キャンパスとも中継され、質疑応答やディスカッションパートでは、両キャンパスの出席者からも質問・意見が出された。

## （1）講演「学生の学習活動の現状とその支援」

講演では、まず最初に、高校教育の現状（高校生の学力・学習状況が多様化していることや高校教育が多様化していること）、学生（大学生）の学習行動・教育観の現状（自発的・主体的学習が少ないこと）について豊富なデータを交えて解説された。そして、学生の自発的・主体的学習を促す上での初年次教育（講演では、「高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習及び自発的な成長に向けて大学での学問的・社会的な経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と紹介されていた)の重要性を強調した上で、名古屋大学での取り組み、取り組みから得られた成果について紹介されるとともに学生の学習サポートについての提案があった。すなわち、夏目教授が所属されている名古屋大学高等教育研究センターが作成する『名古屋大学新生のためのスタディティップス』や『ティップス先生からの 7 つの提案』の内容、名古屋大学高等教育研究センターによる「レポート書き方講座」や「学生論文コンテスト」、アドバイザー制度、チューター制度、名古屋大学の図書館の活動（アカデミック・プレゼンテーション入門、TAのためのライティング支援セミナー、資料検索や電子ジャーナル等についての講習会）について紹介され、また、授業外学習の支援・促進のための提案としてシラバスの工夫や教職員による学生への積極的な働きかけ等が挙げられた。講演後には質疑応答の時間が設けられ、セミナー参加教員から自らの教育体験に基づいて質問・意見交換がなされた。

## (2) 「自発的学習を促すための取り組み例①」

「自発的学習を促すための取り組み例①」として、都市教養学部人文・社会系の松阪陽一准教授より「論理学教育でのソフトウェアの使用例」についての報告がなされた。松坂准教授は、米国のUCLA等で使用されているLogic 2000: Workbookというソフトウェア(非売品)を論理学の授業に用いている(同ソフトウェアを用いているのは国内では本学のみであるとのことである)。米国ではこのようなソフトの利用が活発であり、かつ、大学のサポートもなされているということである。同准教授が論理学教育の三本柱として挙げる①形式言語の構文論、②日本語から形式言語への記号化、③形式言語での形式的な証明の仕方、の各段階でソフトの用意する問題に解答することによって学生が学習を進めることができるということである(ただし、英語ソフトであることから、②は行えない)。論理学の概念をマスターするためにはかなりの数の練習問題を解く必要があり、練習問題をソフトで自動的に行うことには教育的な意義が大きく、(英語版であることに伴う問題点があるもの〔日本語化はコスト面から困難とされる〕)、本ソフトウェアの利用により教育成果が挙げられていると報告された。論理学を好きになる学生は熱心に取り組んでいるようである一方、学生全体のデータを見ると、他の教科との比較で劇的に授業外学習の時間が増加したとは必ずしもいえないとの指摘もなされていた。

なお、セミナーの席上で、実際にLogic2010 (Logic2000の後継版)のベータ版のデモンストレーションがなされ、参加者は松阪准教授の取り組みを具体的な形で理解することができた。

## (3) 「自発的学習を促すための取り組み例②」

「自発的学習を促すための取り組み例②」として、都市教養学部理工学系の横田佳之准教授より「数学教育における自発的学習を促すための取り組み」が紹介された。同准教授の授業について、①雑談パート(つなぎ・つかみ)、②数学の本体のパート、③演習パートの3つに分けて、授業実施上の工夫について報告された。

それぞれのパートについて、①雑談パートは、専門用語や記号等の難解なものをイーズする試みであり、質問の仕方へのサジェスションにもなる、②数学的内容のパートには、おもしろそうな具体例を含む問題から入ることによって多少省略してもまとまった分量を教えるよう工夫がなされている、③演習パートでは毎回小テストを行い、小テストの結果と成績評価を対応させている(演習パートではほとんどできていない学生については、演習の残り時間と昼休みの時間を用いて居残り特訓を実施し、フォローをしている)と説明された。これらは、実際に授業で使用されている教科書や報告者の直近の授業の風景と合わせて説明されたため、

参加者は具体的なイメージを抱くことができた。小テストの結果と成績評価を対応させることにより講義から演習の間に勉強する習慣づけがなされ、学生自身も「演習によって勉強の習慣づけがなされた」と自己評価しているとのことである。また、演習に向けての勉強においては、各学生が家で勉強するほか、コモンスペースで学生が集まって一緒に勉強する習慣ができるようになったと報告された。

#### (4) ディスカッション

上野淳大学教育センター長 (FD 委員会委員長) による司会進行のもと、夏目教授・松阪准教授・横田准教授を壇上のパネリストに、ディスカッションが行われた。松阪准教授・横田准教授の報告に対しては質疑の時間がなかったため、冒頭で授業での取り組み例に対して質疑応答がなされた。

司会の上野センター長がフロアの数名の教員を指名してそれぞれの授業での取り組み・工夫について報告を求めたこともあり、教員の個性およびその授業が対象とする学問分野やカリキュラム全体における位置づけを反映した多様な工夫例がセミナー参加者間で共有された。また、本学の学生の学習の状況について情報提供・意見交換も行われた。

科目や教員の個性を超えた一般論として、受講者数が比較的大きい理数系基礎科目等を中心に、教育の質の改善のために、クラスサイズの適正化と TA 等による授業支援が不可欠であり、授業時間内における学生のケアのために TA の増員およびトレーニングのために予算措置も含めた授業支援が必要であるという点で、パネリストおよびフロアからの発言者の共通認識が形成された。この共通認識は、授業外学習の適正化のためには授業の充実が必要不可欠であるという前提に基づくものであった。

また、大学教育センターの北澤武准教授より本学における e-learning の取り組み状況が紹介された。さらに、セミナーには学生も出席しており、学生の側から自らの経験に基づいて意見が出された。

学生の自発的学習を促すための議論として、理念的な側面 (学生の学問関心・好奇心を刺激するような授業の提供)、テクニカルな側面 (小テストの実施やその採点期間の短縮等)、制度的な側面 (学生の学習を評価するような制度 [大学内のみならず社会的制度]) など多岐にわたる論点が提起されたディスカッションパートおよびセミナーは、大森不二雄教授 (大学教育センター)、夏目教授によるまとめの発言によって締めくくられた。